

第17回 有峰俳句の会 (令和元年10月8〜9日)

1句目は1日目の冷夕谷キャンプ場、東西半島遊歩道・湖岸
2句目は2日目の折立遊歩道を真川まで
を詠んだもの

【講師吟】
てのひらに姫やままゆの露けしや
萬うるし紅葉を這はん虫ならば
中坪 達哉 因

【特選】
有峰のどくに立ちても秋の声
山姥の草履とまがふ朴落葉
成重佐伊子 因

見ゆるはずの薬師岳の肩に熊の棚
榊もみぢ閉山近き岳全し
岡田 康裕 因

熊の子も驚いていゝる落葉道
秋深し木橋を渡る靴の音
石黒 順子 因

落葉踏み熊の糞踏む小道かな
秋天の野原に立ちて一人かな
磯野くに子 因

両音も水の流れも秋深む
青空を見上げ胸元真弓の雲
山下 正江 因

傘かざし御山竜胆手にとりて
雨しとど森の長さ夜誰がものぞ
内田 邦夫 因

幽玄の霧の谷行く吟行会
爽やかや空より青き薬師岳
渡辺美和子 因

熊棚の垂れるる大樹魔玉めく
朝霧や薬師の山稜すすぐごとく
坂本 善成 因

晩秋の湖の深さにふりかへる
十三重の塔柞もみぢに抱かれし
篠原 信子 因

二ミりほどなる小さき葉の紅葉やり
親縁の戻り行く森秋陽照る
木本 彰一 因

新緑の輝く空より青き湖
秋晴れに我が青しと競う湖
吉江 良 因

熊棚や生きる力をまごまごど
青空は真弓の色を引き立たせ
平野 康美 因